

London ロンドン(イギリス)

繕うということ：ダーニングと解剖実習の関係



イギリスの工芸協会(Craft Council)とロンドンのキングスカレッジ付属文化研究所(King's Institute)はクラフトとサイエンスの接点を模索する研究プロジェクトを定期的に行っています。テキスタイルアーティストのセリア・ピムさんと生物神経学を研究するリチャード・ウィングイト博士のユニークな共同研究プロジェクトは2014年に行われました。

ピムさんはアメリカのハーバード大学を卒業後、英国王立美術大学院のテキスタイル科を卒業。編み物とダーニング(かけはぎ修繕技法)とを活かした作品作りで活躍しています。プロジェクトのパートナーのウィングイト博士は「解剖実習が医学生に及ぼす心理的影響」という研究をしています。2人はお互いの専門分野や研究テーマを話し合ううちに、外科手術とダーニングの共通点が『繕い』ということを導き出します。

ウィングイト博士の教え子たちが学ぶキングスカレッジの解剖実習室の片隅で、ピムさんはアーティストとしてダーニングの作業をします。解剖とは何ら関わりのない外部の人物の存在や行為が、解剖実習室の学生たちにどのような相互効果が生じるかという実験プロジェクトが仕掛けられたのです。

ピムさんは3ヶ月間、毎日キングスカレッジ大学病院の医学生や職員が持ち込んだ擦り切れたシャツやパジャマ、手提げやズボンなどをダーニングで修繕します。そして持ち込んだ人物から、なぜそれを持ち込んだのか、持ち込んだものと本人との関係性などを聞き出します。ひ

じの擦り切れ方や痛んだ箇所などは、その持ち主の身体の動きの癖や生活と密接な関係があり、ダーニングをすることでそういった癖を発見し、その人物をより深く理解することができるのです。

一方、解剖実習室では、毎日献体による解剖、手術の厳しい実習授業が繰り返されます。医学生とはいえ、慣れない作業と緊張で心を乱す学生もいます。そんな彼らは淡々と修繕作業をするピムさんの横に座るのだといいます。しばらくすると気持ちが落ち着き、再び実習へと向かうのです。

「解剖室に通い、多くの医学生たちと持ち込まれたもの話を聞き、ダーニングをする。どんなに上手くいった修繕でも、決して元通りにはなりませんよね。でも物に対しての慈しみがわいてくるでしょう。その行為は物も体も同じ。同じ時間、同じ空間で、医学生たちと解剖(痛んだ箇所を解く)、検証(痛み具合をよく見る)、縫合(縫い合わせる)という同じ使命を持って『繕い』の作業を共有することこそが大切なんだと気づいたんです」

解剖室にはもうピムさんの机も姿もありません。残されたのは、壁に貼られたピムさんが繕ぎ当てをした物の写真だけ。でもピムさんが繕った白衣や衣類を身に着けた学生たちが行き来します。ピムさんの存在は解剖室の空気の流れを穏やかにし、医療の将来を担う若い学生たちの志に寄り添うとウィングイト博士は分析します。そんな不思議は相乗効果。ただそれだけです。サイエンスとクラフトの関係、繕うことのエネルギを感じるプロジェクトでした。

レポート/野口 光(ダーニング宣教師 日本代表)

セリア・ピムさんのホームページ
<http://celiapym.com/>
 研究プロジェクトの報告記事
<http://celiapym.com/work/mending-and-anatomy/>



2012年の文化オリンピックでのワークショップをきっかけにダーニングが増殖しているスポーツソックス



ピムさんの友人のシャツは長年の着用と洗濯でボロボロに。それでもダーニングをしながら着続けてくれました



ピムさんもお兄さんも子供の頃に着ていたという子供用のセーター。虫食いやほつれでひどい状態でした



ウィングイト博士との共同研究の工房となったキングスカレッジの解剖実習室。医学生たちの私物もピムさんが繕いました

数年前この写真を発見。ピムさんのお母さんも幼い頃に着ていたことを知り、夢中になってダーニングをしたそうです



画像提供: Michele Panzeri